From the Pulpit of the Japanese Baptist Church of North Texas

August 19, 2012

創造の神、救いの神

イザヤ 40:21-31

40:21 あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。地の基がどうして置かれたかを悟らなかったのか。
40:22 主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。地の住民はいなごのようだ。主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる。
40:23 君主たちを無に帰し、地のさばきつかさをむなしいものにされる。
40:24 彼らが、やっと植えられ、やっと蒔かれ、やっと地に根を張ろうとするとき、主はそれに風を吹きつけ、彼らは枯れる。暴風がそれを、わらのように散らす。
40:25 「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか。」と聖なる方は仰せられる。
40:26 目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。
40:27 ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」と。
40:28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。
40:29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。
40:30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。
40:31 しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。

一、創造の神

1998 年に Deep Impact という映画がありました。小さな星が地球と衝突することが分かり、それが地球を直撃する前に、それを破壊するためにそこに宇宙船を送り込むという場面がでてきます。しかし、現代の科学では、こうした小惑星を破壊したり、軌道をそらせたりすることはできません。人類がこの地球で無事にいられるのは、この大宇宙を造られ、それを支配しておられる神が、人間を愛して、この地球をあらゆる有害なものから守っていてくださるからなのです。地球が太陽からほどよい位置で自転しながら公転していることによって、地上のすべてに光と熱が行き渡り、地球にいのちが育っています。地球はその内部に鉱質を持っていますので、自転により電磁波がおこり、それが太陽から来る有害な宇宙線を防ぎ、いのちを守っているのです。また、地軸が 23.4 度傾いていることによって、春、夏、秋、冬の季節の変化が起こり、地球は美しく飾られます。それに地球自体が「月」という惑星を持つことにより、海に潮の満ち干が起こり、地球の三分の二を占める海の水が腐らずにすんでいるのです。月は月見をするためだけにあるのではないのです。

神はこのように、人間のために、自然環境を備えてくださったのですから、人間はその自然を壊さないようにしなければなりません。それが「エコロジー」という運動です。「エコロジー」という言葉はもともとは「生態学」のことでした。生態学によるとこの自然には不要なものは何一つなくそれぞれが絶妙のバランスを保っていることがわかります。植物は二酸化炭素（CO_2）を材料にして、酸素（O_2）と炭水化物を作ります。動物は植物が作りだした酸素（O_2）を吸い、二酸化炭素（CO_2）を吐き出します。自然界にはこうしたリサイクル活動があって、人間や動物が酸素に不足することがなく、いのちが保たれているのです。この世界には定められた秩序があって、それに従うなら人類は生存を守ることができ、それに逆らうな

ら破滅がやってくるということに人々は気づきはじめたのです。
　しかし、聖書ではそうしたことはとうの昔から教えられていました。神はこの世界に自然の法則を与え、人間に霊的な法則を与えました。神と人と自然は深いつながりを持っています。人が自然を破壊するなら、当然、自然は人に対して報復します。しかし、そればかりでなく、神と人との関係が正しくなければ、人と自然との関係も壊されてしまいます。本当のエコロジーは、人と自然との関係だけでなく、人と自然を造られた神との関係を正していくことにあるのです。
　イザヤ 40:26 に「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって呼ばれる」とあります。神は、この広大な宇宙と地球を、また、人間と命あるすべてのものを実にみごとに造られたお方です。知恵と力に満ちたお方です。「主は永遠の神、地の果てまで創造された方」（40:28）と言われているとおりです。この神を知り、この神に支えられて生きる。それはなんと確かで力強い人生でしょうか。聖書が神の創造の記事から始まっているように、私たちの信仰もまた、神を天地の創造者と信じることから始まります。日本の著名なキリスト者の多くは、聖書を通して創造の神に出会いました。同志社を興した新島襄は、慶應元年（1865 年）、日本がまだ鎖国していた時代に、アメリカに密航し、ボストンにやってきました。新島 襄が神を求めるようになったのは、友人から借りた書物の中に漢語の聖書を見つけ、創世記を読んでからでした。「元始に神天地を創造たまへり。」日本の神々が人間の作り出したものにすぎないのに、西洋の人々が信じる神が、すべてのものを造られた神であることに、新島は大きな感動を覚えました。当時の日本と西洋の違いは単に物質文明の違いだけでなく、信仰の違いから来ていることを、新島は早くから見抜いていたと言われています。新島はボストンで、クリスチャン夫妻の援助を受け、後にそこを卒業することになるアンドーヴアー神学校付属教会でバ

プテスマを受けています。創造の神が救いの神であることを知り、信じたのです。そして、その信仰が彼の 9 年間におよぶ、大学と神学校での学びを支え、明治の日本に大きな貢献をする力となったのです。

二、救いの神

イザヤ書は国を滅ぼされ、捕虜となってバビロンに連れて行かれたイスラエルの人々にあてて書かれたものです。古代の人々は、国と国とが戦争をしてある国が別の国に負けたとしたら、それは負けた国の神が勝った国の神より弱かったからだと考えました。では、イスラエルの神がバビロンの神より弱かったので、イスラエルはバビロンに負けたのでしょうか。決してそうではありません。バビロンの神々は人間の「想像」（イマジネーション）により、人の手によって作り出された神々にすぎません。しかし、イスラエルの神はこの大宇宙と人間の住む世界を造られた「創造」（クリエーション）の神です。神は「イスラエルの神」と呼ばれていますが、それは神がイスラエルをご自分の民として選び、イスラエルを通して、ご自分を現わしてこられたという意味です。イスラエルがバビロンによって滅ぼされたのは、イスラエルが神の民であるのに、天地を造られた神を捨て、偶像に頼ったためでした。しかし、神は、いったん滅びたイスラエルを、もう一度、復興させ、いったん神の民でなくなった人々を、再び、神の民とすると約束してくださいました。

その約束は、イザヤ 40:1 の「『慰めよ。慰めよ。わたしの民を。』とあなたがたの神は仰せられる」ということばに表わされています。「慰め」、とても響きの良いことばです。誰しも「慰め」を求めています。ストレスの多い社会で、男性たちが仕事帰りに一杯呑んで帰るのも、そこで慰めのことばを聞きたいからでしょう。それが解決にならないことが分かっていても人は辛い時、苦しい時は気を紛らわせる場所が欲しいのです。

たとえお世辞でも人の優しいことばや耳を傾けてくれる人を求めています。落ち込んだとき慰めを求めるのですが、それが得られないと余計に落ち込んでしまうこともあります。だったら、慰めなど求めないほうがいいのだと、自分に言い聞かせ、強がって生きていこうとする人もあるでしょう。しかし、それで自分を納得させることは誰にもできません。強がっている人ほど、どこかでポキンと折れてしまうものです。もし、どんな慰めを受けることも拒み続けるなら、その人は人の心を失ってしまうことでしょう。自分も慰められ、他の人にも慰めを与えながら生きるところに人としての本当の生き方があるからです。しかし、ほんとうの慰めはどこにあるのでしょうか。イザヤ書が「慰めよ。慰めよ。」と言っているのは、みずから神との契約を破棄した人々に対してでした。神とイスラエルの間に立てられた契約は「わたしはあなたの神、あなたはわたしの民」という契約でした。契約というものは、どれも相互のものです。一方が条件を守っても、他方がそれを破れば、契約は解消されます。イスラエルが神の民でなくなったということは、神がイスラエルの神でなくなったということを意味します。イスラエルはその罪によって「神無きもの」となったのです。ここに人の罪の深さがあり、罪の闇があります。そして、この闇は人間にどうしようもない惨めさ、やり切れなさをもたらします。人はその惨めさを認めたくないので、必死になって明るく振舞おうとするのですが、それはますます闇を暗くするだけです。人間の慰めはこの罪の闇を解決することはできません。人間の慰めはそれがどんなに真実なものであったとしても、そこには限界があります。傷ついた人を助けてあげたいと願っても、人間が出来ることには限りがあります。人のたましいの奥底に潜む闇に光を届け、深い絶望をいやすことはできないのです。それができるのは神だけ、天地を創造された力ある神だけです。

　神を捨てたイスラエルは、神なき者として滅びて終わるはずでした。しかし、神は、イスラエルが破った契約を、その大き

な愛とあわれみによって修復してくださるのです。神はしばらくの間イスラエルを捨てましたが、再び拾い上げて、囚われていったバビロンから再び約束の地に連れ戻してくださるのです。ですからイザヤ書は「慰めよ。慰めよ。＜わたしの民＞を」と言い、「＜あなたがたの神＞は仰せられる」と言うのです。神はイスラエルをもういちど「わたしの民」と呼び、ご自分を「あなたがたの神」と言ってくださるのです。「慰めよ。慰めよ」と二度重ねて語られているのは、神のこの情熱的な愛を示しています。

「あなたはわたしの民、わたしはあなたの神。」この関係は、神とイスラエルだけの関係ではありません。イスラエルと縁もゆかりもなかった私たちにもまた、神は「あなたはわたしの民、わたしはあなたの神」と宣言してくださいます。イザヤ書は、イスラエルだけでなく、全世界のすべての人がその罪を贖われて、神の慰めを受けることを預言しています。イエス・キリストが、すべての人を罪とそれがもたらす惨めさや絶望から解放する救い主として世においでなったとき、それは成就しました。私たちがイエス・キリストを私の神と信じて受け入れたとき、それは実現しました。天地を創造された神が、イエス・キリストによって、私の神となり、私が神のものとなる、ここに、この世が与えることのできない、本物の慰めがあります。

困ったとき誰かから助けてもらう、いやな目にあったとき優しくしてもらう、疲れたときに力づけてもらう、どれも、私たちに必要な「慰め」です。そうしたものが私たちにいらないわけではありません。しかし、そうした「慰め」は、罪を持ち、神を持たなくなっている者を十分に慰めることはできません。人のたましいの深い求めを満たすことができないのです。皆さんは、人間的な慰めを求めていたときは、それによっては満たされることがなく、フラストレーションを感じていませんでしたか。しかし、どんな人間の慰めによってもいやされることがなかったものが、神によって、イエス・キリストによって、い

やされ、満たされたのではありませんでしたか。神が私の罪を赦し、私を神の民として受け入れてくださる。神が私の神となり、私とともにいてくださる。これこそがあらゆる慰めのみなもとです。罪に苦しみ、神のおられない暗闇に恐れおののく人間にとって「その労苦は終わり、その咎は償われた」（イザヤ40:2）という言葉ほど、大きな慰めのことばはありません。

神は天地を創造された偉大な神ですが、同時に、あわれみの心がいっぱいではちきれそうなお方です。人は自分の意志で神に背を向け、神から離れていき、それによって自分で自分を苦しめ、傷つけています。いわば自業自得です。なのに神は、人間が苦しむ姿を黙って見ていることがお出来にならず、苦しむ者たちに手を差し伸べられるのです。いったん、神を信じた者が神のもとから離れて行ったとしても、その人をそのままにはせず、神に立ち返るようにと招き続けてくださっているのです。天地を造られた偉大な神、無から有を生じさせた全能の神が、イスラエルのように自分の罪に苦しむ、無きに等しい者に心をかけてくださるというのは、信じにくいことかもしれません。しかし、無から有を生じさせた神だからこそ、無きに等しい者を救うことができる、無力な者を、その偉大な力で満たすことがお出来になるのです。創造の神こそ、救いの神です。

イザヤ40:31は、この神の力を受けて生きる人々の姿を描いています。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」最近「元気をもらう」ということばがよく使われるようになりました。ステージで歌ったり踊ったりしゃべったりするエンターテナーが、観客に向かってリップサービスで「みなさんから元気をもらいました」などと言うと、観客が「ワーッ」と興奮するのです。たしかに、大勢人が集まり、賑やかにしているところでは気分も高揚します。しかし、それが続くのはほんの一瞬です。聖書が教えているのは、人間の元気ではありません。全世界、全宇宙を造られた神が、私たちを新

しい力で満たしてくださる、その力です。イザヤ書は鷲をその例としてあげています。鷲は、羽が古くなると抜け落ち、新しい羽に生えかわります。ですから、いつも若々しく見えるのです。また鷲はどんな鳥よりも高く飛ぶことができます。創造の神、救いの神を信じる者は鷲のように高く、力強く、生き生きとした歩みをすることができるのです。

ここに「主を待ち望む」とありますが、これも神への信仰を表わすことばです。「待つ」ということは現代の生活に欠けていることのひとつです。母親がこどもに対していちばん多く使うことばは「早くしなさい」です。現代の社会は早いテンポで動いています。しかし、表面が動いているだけで、何も変わっていません。鼠の競争のようにちいさな世界で競いあっているだけです。ある人が言いました。「ラットレースに勝っても、鼠は鼠のままだ。」耳の痛いことばです。鼠ではなく、鷲になりましょう。鷲は決してじたばたしません。風が動くまで待ちます。そして気流に乗って天高く飛びかけるのです。私たちも、苦しいとき、弱さを覚えるとき、困難が解決されない辛いときでも、神が働かれるときを、聖霊が動かれるときを待ちましょう。もちろん、主を待つことはぼんやりと待つこととは違います。熱意をもって、期待をもって、希望をもって待つのです。そのようにして天地の創造主を私の救いの神としましょう。この神の慰めの中で、いやされ、力づけられていきましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたはこの世界のすべての物をつくり、それを治めておられます。あなたはそれほどに偉大なお方であるのに、自分の罪のために滅び行く者を、あわれみ、赦し、慰めてくださる、救いの神となってくださいました。どうぞ、目を高く上げ、あなたを仰ぎ見、また、あなたを待ち望む者としてください。私たちの救い主、イエス・キリストのお名前で祈ります。